

# 友だちとのかかわりを持ちながら、生き 生きと主体的に活動する子をめざして

—— 表現活動に視点をあてた一自閉児の実践 ——

野 坂 尚 史

## 1 はじめに

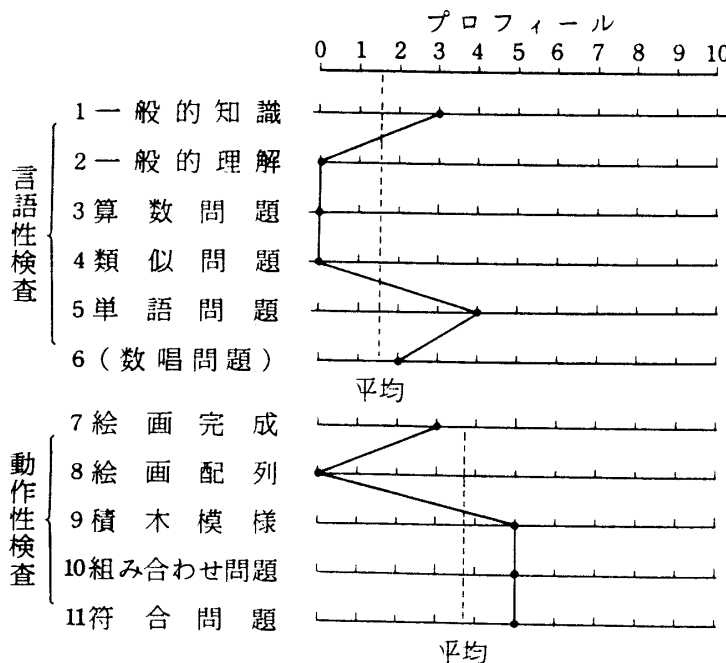
自閉児に対する指導の難しさは、多々取りあげられ、私達の当面する今日的課題である。その原因は、今だに不明であるが、現在のところ自閉症は、その症状として、認知・情緒の障害を合わせもっていると考えられている。その指導仮説として、認知・情緒の障害に目を向け、その落ち込んでいる部分を引き上げようとする立場と、その自閉児の持っている特質や興味・関心を生かしながら、いびつながらも、さらに全体的な発達を促そうとする立場とがあると考ええる。私は、対象とする児童の実態も考えて、後者の立場より、一児閉児（以下K児と記す）の表現活動に視点をあて、「友だちとのかかわりを持ちながら、生き生きと主体的に活動する子」をめざして実践を続けてきた。その取り組みについて、記してみたい。

## 2 K児の実態について

K児 昭和47年6月29日生（6年男子）

K児は、児童相談所の3才児検診にて、自閉症と診断された。その後、病院、児童相談所にて面接指導を受け、本校の小学部に入学した。現在、6年生である。

(1) 諸検査によるK児の実態（WISC知能検査、津守式乳幼児発達検査による）



IQ = 44 (VIQ = 45 PIQ = 57)

(グラフ1) WISC知能検査のプロフィール

(ア) WISC知能検査の結果より

(昭和59年11月26日実施)

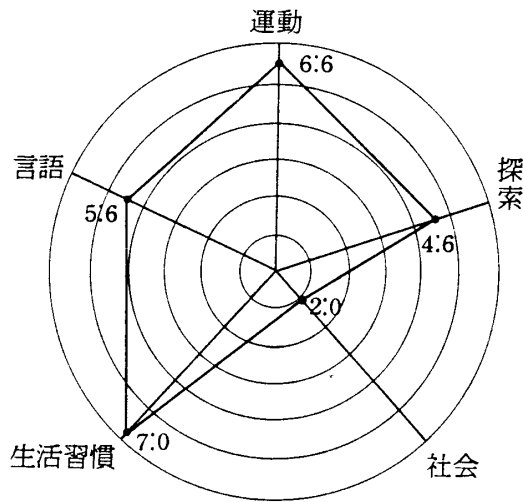
IQ = 44 (VIQ = 45, PIQ = 57)

中度の知恵遅れであるといえる。

(グラフ1)を見てわかるように、動作性検査と言語性検査との間に大きな差がある。このことから、K児は、言語として与えられた事からを理解したり、自分の要求や返答を相手に伝える能力が劣っていることがわかる。どちらかといえば、K児は後者が弱く、理解はできるが相手にうまく伝えることができないため、

I Qは、実際の知能よりもかなり低くでているように思われる。

(イ) 津村式乳幼児発達検査の結果より(昭和59年11月28日実施)



「運動」・「生活習慣」は、かなり高く、運動能力に障害はなく、生活習慣も自立していることがわかる。その反面、「社会」・「探索」の低さは、対人関係ができていないこと、物を持ってその正しい扱い方がわからないことによるのではないかと考えられる。また、「言語」については、5才6ヶ月となっているが、理解言語と表出言語との間にかなりの差があり、表出言語の低さがこういった段階となって現われるのであろう。理解言語は、さらに高い段階にあると考える。

(グラフ2) 津守式乳幼児発達検査のプロフィール

(2) 自然観察によるK児の実態

K児の行動の特徴的なものに、同一性保持の欲求(こだわり)がある。玉井収介(注1「自閉児の行動」P66)によれば、同一性保持とは、「その子が同一であることを要求するなり、学校へ行くなり、その場で要請されている行動がとれる、その次元の行動である。」とのことである。K児は、常同行為、パニックよりも、この同一性保持がしばしば見られる。その主な事項については(表1)の通りである。このような彼の欲求を認めて

項目	その内容
物事の順序に関するもの	物事を発表したり、実施したりする時の順番に対してこだわりがある。「1番」「3番」を好む。
時計の時刻に関するもの	「ぼく帰るのは3時」「ローカルニュースを見るのは11時45分」と決めていて、時計をみて、その時間になればそのようにしないと気が済まない。
高さに関するもの	給食時に使用するイスは、自分が一番高いものを使用しなければ気が済まない。
ぬり絵をする際の色の選択	自分で何色を塗るのか決められない。1つ1つのワクの中に鉛筆で色の名称を書いてもらってからその通りに塗る。
牛乳のパックの日付の位置	ストローのさし口から見て、日付が右側についているものでなければ自分のものとしていない。

(表1) K児の同一性保持の例

やらなければ、イライラと落ち着きをなくしたり、大声をだして不適応行動をとってしまうこととなる。しかし、そういった彼の欲求を一時的にでも認めてやれば、場に適應した行動がとれるのであり、その場における指導者の接し方が、彼のその後の活動を大きく左右するといえる。

知的には、かなり高いものがうかがわれる。小学校三年生で習う程度の漢字の入った文章は、簡単に読みこなすことができる。また、100までの数系列は、きちんとできているし、数詞と数量の関係も10程度であれば、解っているようである。

K児の好きな活動は、歌をうたったり、日記を読んで発表したり、音楽にのって集団の中で踊ることである。こういった時のK児は、生き生きとしていて、精一杯、自分自身を投入して活動しているように思われる。

### 3 テーマ設定の理由（指導仮説）

K児は、場に適応した行動がとりにくい児童であるといえる。どういった理由でK児は、授業中、教室後方を走りまわったり、うなり声をあげたりするのであろうか。それは、K児がその場で、どのように対処すれば良いのかわからないからであろうし、また、与えられている課題自体が、F. J. をして拒否行動をとらせているようにも考えられる。歌をうたっている時、みんなの前で日記を発表している時、踊っている時のK児は、みんなと触れ合い、実に生き生きとしていて楽しそうである。私は、「K児が生き生きと主体的に学習に参加できる活動場面を設定し、そこで精一杯活動させて、成就感を十分に感じとらせる」、そういったくり返しの学習が、K児を主体的に生きる子にし、ひいては、落ち着きを失ったり、パニックを起こしたりするなどの不適応行動も減少させていくことにつながるのではないかと考えた。

そこで、生活単元学習のどの単元においても、K児が興味、関心をもち、かつ、友だちや先生と触れ合う中で実施できる活動内容を盛り込み、私がK児を担当した4月より、実践を続けることにした。また、指導する際は、K児の同一性保持の欲求をできる限り認め、K児が、学習場面から離れぬよう配慮するようにした。

### 4 生活単元学習の流れと取り組みの概要

4月から12月現在までの生活単元学習の流れと取り組みの概要は（表2）に示す通りである。単元そのものの主となる活動が、K児にとって扱いたい表現活動とは、ほとんど離れてしまっているものもあるが、その中においてもK児が喜んで活動できる場を何とか設定しようと努めてみた。また、どの単元においても、K児の同一性保持の欲求（こだわり）が見られたのだが、それがどういった内容のものであるか、そして、それを認めてやれば、どのような学習参加ができたのか表に付記してみた。表を見てもらえば、わかるように、同一性保持の欲求（こだわり）を認めてやれば、どの単元においても、参加意欲の差はあるものの、主体的に伸び伸びと活動できたようである。

K児にとって取り入れたい表現活動と、単元での主たる活動が一致したのは、6月下旬～7月上旬のたなばた発表会、11月初旬～11月下旬の学習発表会、11月下旬～12月下旬のクリスマス会の3つであった。次に、実践事例として、K児にとって最も表現活動の機会が多く与えられ、K児が最も生き生きと活動した学習発表会を抽出し、その取り組みとK児の様子について、紹介してみたい。

期間	4月上旬～ 5月中旬	6月上旬～ 6月中旬	6月下旬～ 7月上旬	11月初旬～ 11月下旬	11月下旬～ 12月下旬
単元名	新しい友だち	水あそび	たなばた発表会	学習発表会	クリスマス会
設定表現した活動	新入生歓迎会では、児童を代表してあいさつをする。	お互いに体に絵の具を塗り合い、曲に合わせて踊る。(ボディ・ペインティング)	歌と踊りで、3場面をつないだミュージカル「夏」を実施する。	小学部劇「舌切りすずめ」の練習をし、発表する。	クラス劇「サンタクロースの大きなプレゼント」の練習をし、発表する。
K児のこだわり	自分のあいさつの順番は「プログラム3番」と自分で決めてしまう。	「ぼくは赤。赤が一番です。」と、赤色に固執する。	自分の座る位置が3番めであることにこだわる。	大きいつづらに固執し、小さいつづらを取るべきところでもがまんでできなかった。座る位置は、3番めにこだわる。	そりにのってでてくる順番にこだわった。いつも先頭でなければ、気が済まなかった。
こ上だでのりKを児認めした活動	はりきって練習し、大きな声であいさつできた。	インディアンになって生き生きと踊った。絵の具を体に塗り感触を楽しんでいた。	特に「スイカの名産地」の歌が好きで、ペーパサートを振って、元気よく歌をうたっていた。	主役のおじいさん役にとり組み、生き生きと演じた。	学習発表会ほどののりはなかったが、自分のセリフを覚えてサンタクロース役を果たした。

(表2) 生活単元学習における表現活動とK児の取りくみ

## 5 実践事例

生活単元「学習発表会」 小学部劇「舌切りすずめ」を通して

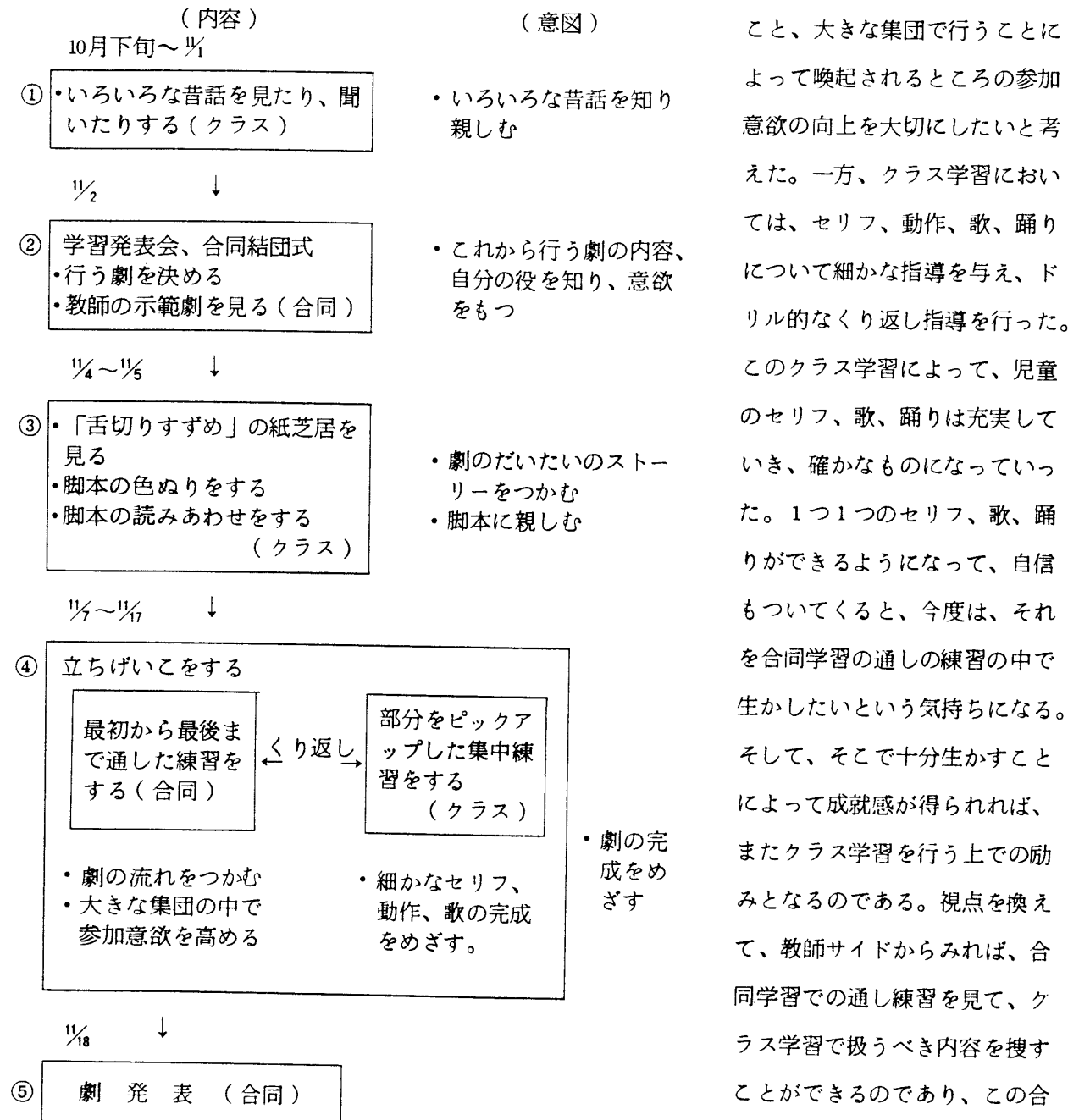
学習発表会は、日頃の児童、生徒の学習の成果を発表する年一度の全校行事である。今年も11月18日、地域の人々、父兄を招いて行われた。学習発表会の主なだしものは、劇と音楽発表であり、今年も小学部は劇と音楽発表にむけて取り組んできた。ここでは、生活単元「学習発表会」の劇指導の実際とK児の活動の様子について記してみたい。

小学部は、毎年、日本の昔話の中から、最も人々が親しみ、なじんでいると思われるものを選び、それを題材とした劇を実施することになっている。今年は、小学部の児童の動きが自然に劇の中に生かせるということ、ストーリーがだいたい理解できるであろうということ、そして今までにまだ実施していないということから、「舌切りすずめ」を実施することになった。

### (1) 劇指導の進め方及び指導形態

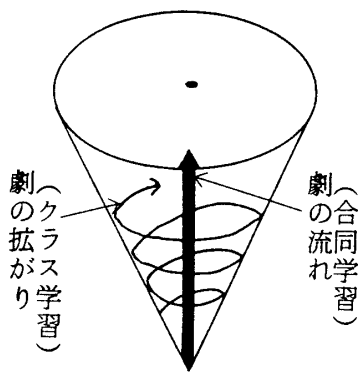
まず、この「学習発表会」の単元に入る前に、クラス扱いで、休憩時間等を利用して、昔話に親しませるよう配慮した。特に、小学部で実施しようと計画していた「舌切りすずめ」については、他の昔話よりも、時間的にも質的にも十分知らせるよう努めた。そして、結団式へと入った。子ども

も達にどんな劇がしたいのかを発表させ、全員で決めた劇を、教師が全員で示範して見せた。教師のオーバーなゼスチャーやセリフに子ども達は大喜びだった。そして、今度はクラスごとに持ち帰り、劇を実施するためのあたためを行った。具体的には、「舌切りすずめ」の紙芝居を作ったり、絵のたくさん入った脚本の色塗り、読み合わせなどをさせた。こうして意欲が高まったところで、立ちげいこへと進めていったのである。立ちげいこでは、原則として二つの指導形態を並行して実施することにした。合同学習においては、通しの練習をすることによって劇の流れをつかむ



(図1) 劇指導の進め方及び指導形態

的に成功だった。換言すれば、合同学習が劇の流れを作り、クラス学習が劇の拡がりを作っていたといえる。(図2参照)



(図2) 劇指導における合同学習とクラス学習の有機的関連

## (2) K児を指導するにあたっての留意事項

私は、K児を指導するにあたり、大きく分けて、教材（題材の選択及びシナリオの作成）と指導法（指導上の方針及び手だて）の二つの観点から、次のような事項に注意してK児の指導にあたった。

### (ア) 教材の観点から

- 題材を選ぶ際、その内容が、K児を含め児童の発達段階でも十分理解でき、彼らの自然な動きが劇に生かせるものを選んだ。

- セリフは、K児を含め児童が日常好んで使うことばに近いものにした。
- K児の同一性保持（こだわり）を生かして、同一のパターンのセリフや動きを多用した。
- 歌と踊りを多用し、セリフを覚えなくとも、劇が進行するよう考えた。

### (イ) 指導法の観点から

- K児の同一性保持（こだわり）を受容し、K児が喜んで参加できるよう努める。
- 授業の終わりには、必ず評価してやり、賞讃を忘れない。
- K児の動きを明確に知らせるため、ストップマークなど使用する。

以上のことを留意して、指導にあたるように努めた。

## (3) K児の取り組みの実態

学習発表会結団式から、立ちげいこに入るまでを第一期、立ちげいこに入ってから前半、後半をそれぞれ第二期、第三期とし、学習発表会当日に至るまでの様子と、学習発表会当日の様子を、時間の経過にそって記してみたいと思う。

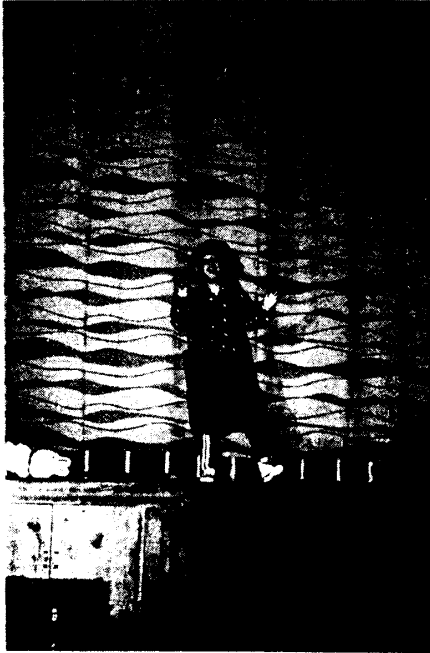
### 第一期（学習発表会結団式～クラスでのあたため期）

事前に「舌切りすずめ」の話をクラスでしていたので、結団式においては、「何をしようか。」という問いかけに、「舌切りすずめが、いいです。」と答えた。その後の教師による示範劇は、見たり、見なかったりの様子であまり関心なさそうに思えたが、教室に帰ってから聞いてみると、よく覚えており、彼なりにしっかり見ていたようである。教室に帰ってからしきりに「ぼくは、おじいさん。」「ぼくは、おじいさんです。」としきりにくり返し、自分を納得させているかのようにあった。クラスで扱った紙芝居は、同じクラスがよく発言する児童に刺激されて、挙手し、その場面の様子を話してくれることもあったが、総じて、むらがあり、授業にのる時とのらない時の差が大きかった。

### 第二期（立ちげいこ、前期）

最初は、舞台の上にあがっても落ち着かず、その場から、離れようとするが多かった。相手を見たり、前を見てセリフを言う余裕など全くなく、口調も一本調子で、かなり早口だった。

同じ箇所をしつこく、くり返し練習させると、イラ立ちがみられ、うなり声をあげて、その場から走り去ろうとする事もあった。同一性保持の欲求(こだわり)もいくつかみられた。「大きいつづら、小さいつづら、どちらがいいですか。」の問いかけに、小さいつづらを取るべきところを、「大きいつづら。ぼく、大きいつづらがいい。」と絶対に聞かないことがあった。また、「ぼく、三番。」と言って、二羽のすずめのまん中に座るべきところを左側から三番めの位置に座ると言い張ったこともあった。前者のこだわりについては、ストーリーの問題にかかわることであ



生き生きと歌って踊る  
K児(第三期)

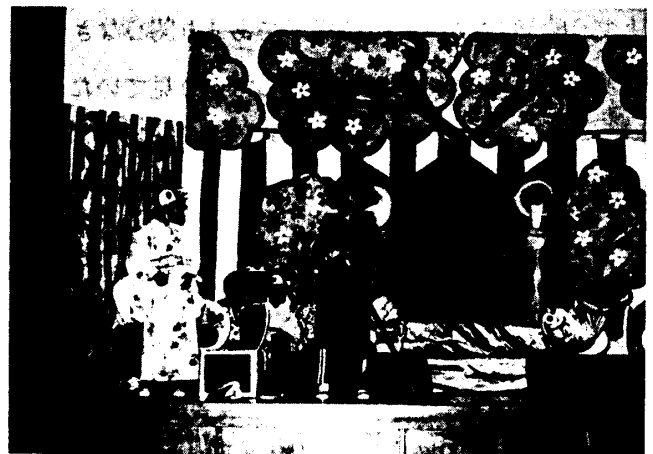
るので、小さいつづらをK児の好きな赤に塗り、「赤いつづらが一番」と教え、こだわりを別のこだわりで置き換えることで納得させ、小さいつづらを取るようにさせた。また、後者のこだわりについては、ストーリーの上からも、そう大きな問題でもなかったため、そのままこだわりを認めるようにした。後半になるにつれ、K児自身も、少しずつ先が見通せるようになり、指導者が指示しなくても、次の出番を察して待てるようになってきた。

### 第三期(立ちげいこ、後期)

舞台の大道具、小道具がそろうにつれて、少しずつ、劇の世界に浸って演技できるようになってきた。セリフは、まだ早口でしゃべりがちであるが、全体的な見通しができ、安定して練習に参加できるようになってきた。セリフの切りだしが一人ででき始め、歌を伸び伸びうたって、楽しそうに踊るK児の姿が見られ始めた。こだわりは、この期にあっては、ほぼ解消し、自分の演技については、頭の中で、しっかり整理されてきたように思われた。この期には、生活ノートの日記欄に劇の練習のことをしばしば取りあげて書くようになり、彼の全生活のほとんどが、劇活動に投入されていたようだった。

### (学習発表会当日の様子)

練習の時と同じ調子で、淡々と劇を演じていた。途中、自分のセリフを忘れたり、早口で話してしまうところもあったが、その他は、ゆっくりと大きな声でセリフを言い、来ていた父兄を驚かせた。また、歌、踊りは、自分の好きなところであるだけに、のりにのってうたい、演じていた。誰も、当初、



のりにのって演ずるK児(学習発表会当日)

K児が、これほどにまで、劇のストーリーを覚え、はっきりとセリフを言い、生き生きと歌や踊りをこなすとは予想もしておらず、驚嘆の一日だった。

#### (4) 考 察

生活単元「学習発表会」は、K児が最も生き生きと活動した単元であった。その成功した理由として、私は3つの事項をあげることができると思う。まず第一は、学習内容の中にK児の好きな表現活動が十分含まれていたということである。好きだから、必然的にやってみたくなるのである。第二は、合同学習で見通しを持たせながら、セリフ、歌の練習をさせたことである。K児のような児童については、見通しをもたせることが、次の行動への意欲となる以上に、精神の安定につながるのではないかと考える。そして第三は、K児の同一性保持の欲求(こだわり)を生かしてやったことである。K児は、このことによって随分、情緒的に安定した状態で学習できたのではないだろうか。「学習発表会」以後のK児は、表情を見ても、とても明るく、友だちへのかかわりも少しではあるが増えてきたように思われる。

## 6 一年間の取り組みの考察及び今後の課題

私は、K児が興味、関心を持つ表現活動に視点をあて、友だちとかかわりをもちながら、生き生きと主体的に活動する子ども像を求めて実践を続けてきた。指導の原則として、同一性保持の欲求(こだわり)を認め、できる限りK児の好む表現活動を生活単元学習の中に盛り込むよう配慮してきた。12月末現在のK児を4月当初の頃と比べると、学習にとり組む主体性、持続力においてかなりの差異を認めることができる。4月当初は、5～10分置きに学習場面から離れていたが、現在では、一時間にあるとしても一回程度の状態になっている。また、表情が明るくなったというのも、私のみならず、K児の母親も指摘するところである。加えて、友だちとのかかわりも頻度が増すと同時に、質的にもより深いかかわりができるようになった。K児が、自分の見ていた新聞を、S子に半強制的に奪われた時、「S子さん、返して下さい。返せー。」と叫んで、S子を追い、S子をたたき姿など、4月には見られなかったことである。このように、友だちとのかかわりをもつということ、生き生きと主体的に取りくむこと、という観点からK児を見れば、一応の取り組みの成果があったと考える。今後の課題としては、今までの取り組みをさらに発展させ続けていくと同時に、認知面に視点をあてた個別指導をも充実させていきたいと考える。